

コロナ禍を経て、実に5年越しに本日の講演会は実現しました。第31回生の本多佐保美です。担任は大野静龍先生、ピアノの師が桐山春美先生で、私の在学中に山田純先生が着任されました。当時、小泉文夫という民族音楽学者がたくさんの本を出版し、受験生の私は大いに啓発されており、そして楽理科出身の山田純先生との出会いから楽理科という道を進路として考え、今日に至ります。今現在、千葉大学教育学部音楽科にて教員養成にたずさわっています。千葉大には1995年に着任し、今年で30年となります。

ひとが音楽を学ぶとか、教えるとはどういうことだろう、というのが私の一番初めの素朴な出発点でした。また現在の日本においては、基本的に学校音楽教育の拠ってたつところは西洋クラシック音楽となっています。日本という国に生まれ日本人でありながら、日本の伝統音楽というものが遠い存在となっている、これはいったいなぜか。こうした素朴な疑問が私の研究生生活の原点でした。

小中学校の教科の一つに「音楽」があるということは、人は誰しも音楽を学んだ方がいいという暗黙の社会的な了解があるのだと思います。学校での音楽教育をとおして子どもたちにどんな力を身に付けてほしいと考えるのか。学習指導要領など、国の考え方においては、近年のグローバル化する社会において必要となる資質・能力として、世界の中の日本ということで、日本人として大切にしてきた音楽文化を子どもたちが継承し発展させていくことが重要であること。また、多様性の理解や、異なる価値観をもつ人々との協働ができるような力を身に付けるということも言われています。

そのような今日的教育課題をふまえ、これまでに小学校や中学校で日本の伝統音楽や世界の多様な音楽を教材とする授業を、現場の先生方と一緒に実践研究してきました。講演の中では、小学6年生を対象とした雅楽の授業実践、また小学2年生を対象としたフィリピンのカリंगा族という少数民族の音楽であるトガトンという竹の楽器を使った授業実践を詳しく紹介しました。

授業をつくるにあたって留意したのは、子どもたちが試行錯誤したり探究したりして、自身の思考を活発に働かせている状態をつねに目指したことです。小学校6年生を対象とした雅楽《越天楽》の授業では、単に《越天楽》を鑑賞するにとどまらず、自分たちで《越天楽》ふうな旋律をつくる活動を取り入れました。子どもたちは、じっくりと本物の雅楽の演奏を聴き、また口唱歌という伝統的な教習方法で雅楽を歌ってみるという活動を行ったあと、旋律をつくります。まずは個人で、そして二人組で旋律をつくり発表しました。

旋律を創作するのに使っていい音は「ミソラシレ」、リズムパターンもいくつか提示してそこから選んで創作します。制約がある中でも、それぞれが「雅楽らしい旋律ってどんなものか」と思考をめぐらせ、音を試したり探したりしながら、そしてペア活動で友達と話し合ったり協力しながらの創作活動となりました。

後援会のあと、色々なご意見をいただきました。多様性こそ、音楽の授業で教えられるのではないかとのご意見、また今の時代の子どもたちにわらべうたや日本の伝統音楽はどのような存在なんだろう、という疑問などです。私自身、今回、貴重な機会をいただき色々と触発される部分がありました。音楽を教える、学ぶということは、人間にとってどういう意味があるのか、引き続き考えていきたいと思います。